

交詢雑誌

第492号 付録

公開講座講演 (平成十七年度)

『幸齢化を支える医学』 — 第四回 —

『西洋薬と東洋薬の上手な組み合わせ』

講師 渡辺賢治

(慶應義塾大学医学部助教授)

漢方の話ですが、毎年、呼ばれて
いまして、実はそろそろネタが尽き
てきて(笑)、今年は「漢方と西洋薬
との組み合わせ」ということでお話を
しようかと思えます。最初に風邪の
話をして、それから漢方にしかない
ような働きということ、六君子湯
“という胃の薬と、大建中湯”とい
う腸の薬の話をさせてもらいます。
そして、もし時間があれば、これか

ら高齢社会を迎えて、癌が大きくな
る問題になってきますが、既に癌の死亡
率は三三%ぐらいになっております
ので、三人に一人の方は癌で亡くな
られる。癌になると、昔は悲惨なイ
メージがあったのですが、今は高齢
になれば誰でも癌になるといふふ
うな考えで、痛みへのコントロールも
うまくできるようになりました。そ
ういった時に、さらに漢方もあると

非常に治療がうまくいく、というよ
うな話をしたいと思います。
〔スライドを使いながらの講演〕

「風邪」について

皆さんが風邪の時は、すぐに近く
のかかりつけの先生のところへ行っ
て、お薬を飲まれると思いますが、
これは西洋の治療でも、漢方の治療
でも、やはり初期に対処するとい
うことが大事です。大体、病院へ来る
時は、風邪をこじらせて熱が出て、
咳が出て、どうしようもなくなつて
来るのですが、風邪は本当に引き初
めが一番大事なのです。

まず西洋薬と東洋薬というか、漢
方薬とのものの見方の違いとして、
西洋薬の場合には、病気を治療する。
例えばリウマチの治療薬とか、高血
圧の治療薬というのがありますが、
漢方薬の場合には、基本的に高血圧
の治療薬というのではないのです。高
血圧を持っている人の治療薬とい
うことで、あくまでもそれを持って
いる患者さんの治療をするというのが、
漢方の考え方になります。

「風邪」と一口に言っても、いろい
ろなウイルスがあります。今年もワ
クチンを打たれた方が、皆さんの中
にも、結構、いらつしやると思いま

すが、今年はA型がニューカレドニ
アとニューヨークで、B型が上海で
した。幾つかの型があるわけです。
その中で、その年に一番はやるであ
ろうというふうなものを予想して、
A型、B型ともにワクチンとしてつ
くったものを射つわけです。大体、
抗体ができるまでに四週間ぐらいか
かり、三、四ヶ月は有効です。結構、
皆さん気が早いので、十月ぐらいか
ら射ち始める方がいらつしやるので
すが、あまり早く打つと、その効果
が薄れてしまうということがありま
す。十一月から十二月の半ばぐらい。
あまり遅いと、流行に乗り後れてし
まうことがありますので、タイミン
グが難しいのですが、去年はちよう
どワクチンの切れた三月ぐらいには
やって、早めにワクチンを打たれた
方は、抗体価が下がっていたとい
うようなことがございます。

風邪の中にはインフルエンザワ
クチンがあるために、「インフルエンザ」
が有名ですが、症状が激烈なわけ
です。時には死亡する方もいらつし
やる。インフルエンザにかかると高熱
が出たり、関節から筋肉が痛いとい
うような症状があります。一番、怖
がられているのですが、実はそのほ
かにもいろいろウイルスがあつて、
一口に「風邪」と言ってもいろいろ



なものがあるわけです。

風邪の治療薬

それでは風邪の治療薬は何かというと、皆さん、「タミフル」というの名前をお聞きになったことがあると思うのですが、「タミフル」はウィルスが増殖する前に、初期に飲むようなお薬です。基本的にはウィルスの増殖を抑えてくれるのですが、最近では「タミフル」の無効なウィルスとか、いろいろなものが騒がれております。

私が学生時代に、呼吸器内科の横山先生という大教授が、私どもの試

験の時に出した
出題なのです
が、「風邪の治
療を挙げよ」と
いうので、当然
みんな治療薬だ
と思つて、「解
熱剤」とか、い
ろいろ書いたの
ですけれども、
答えは、「安静、
保温、保湿、水
分摂取」という
ことでした。と
にかく眠る。た

だし、寝汗で体を冷やすのに注意を
する。あるいは体を休める。これは
なかなかできません。きょうはあそ
こへは行かなくてはとか、風邪が軽
いから大丈夫だろう、というふう
に思つて活動しているうちにこじれて
しまう。風邪かな？と思つた時に、
すぐ寝るといのがコツなのですが、
それがなかなかできない。それから
保温と保湿。ウィルスというのは高
い温度に弱いのです。湿度にも弱
いので、部屋を温かくして湿度を保
つことが大事です。それから水分の摂
取。「水でもジュースでも飲みやすい
もの」と書いてありますが、あまり
冷たいもので体を冷やしてしまうの

は良くないので、温かいものを飲ん
でいただくということが大事です。
ホームページからとってきたもの
を見ましても、横山教授から教わ
たことと今の常識とが、あまり変
つておりません。まず寝ること。そ
れから体を温めること。栄養の補給
部屋を温める。部屋を加湿する、と
いうようなことが書いてあります。

要するに、「風邪の特効薬を見つけた
らノーベル賞だ」ということが昔か
ら言われておりますが、風邪には自
分の体を強めるしかないということ
が基本的なことになります。
漢方ではどういうふうに考えるか
という、「風邪と体のせめぎ合い」
といつて、病気の進行度がカギな
のです。ここが西洋の治療とはちよ
つと違うところになります。まず病
気の勢いというもので、ウィルスの
量とか、強さというものがあ
ります。それから熱が出る。暑がる。
もしくは寒がるという体の反応のほかに、
もう一つ大事な要素は、経過時間
です。風邪といつても、きょうの状
態と明日の状態は違います。刻一刻
と症状が変わっていくことな
ります。

風邪を引くと熱が出ますが、熱が
出るというのは、ウィルスをやつ
けるための防御機構なわけです。ウ

ィルスは熱に弱い。熱が上がれば上
がるほど、ウィルスは死んでいくの
で、熱をいかに早く上げるかとい
うことです。実際にわれわれも実験
的に見ているのですが、ウィルス感
染すると、インターフェロンとい
う物質が出ます。そのインターフェ
ロンが、自分はやられたけれども、自
分の仲間の細胞を守るうとい
うので細胞に働きかけると、ウィ
ルスの侵入を防いでくれる。要するに、自分
はウィルスにやられてもうダメだ
けれども、仲間を救おうとする。この
インターフェロンが出るスピードと、
ウィルスの増殖のスピードとのせ
めぎ合いなのです。また、インター
フェロンが出ると熱が出る。熱が出
ると、ウィルスは熱に弱いとい
うようなことが働きます。

「セットポイント」と言つて、頭
の中に熱を決めているところがある
のですが、それが体温の中核に働
きかけて、「熱を上げなさい」とい
う指示が出ます。そこで敏捷な人
はすぐに熱が上がるのですが、鈍
い人は、指令が出てなかなか反
応して熱が上がらない。その間に
ウィルスがどんどん増えてしま
うので、いかに早期に体温を
上げることが大事になります。実
際に、風邪っぽいのは、思
つた時にまずやつて欲しいのは、



私なども旅先で薬がない時にやるのですが、首の後ろを温めること。タオルを巻いたり、ドライヤーを当てたり、首筋を温めることで、熱のセットポイントを変えらるということがあります。それから温かいものを食べる。とにかく自分の体温を上げるように上げるように、いろいろな工夫をすることが大事になります。

産生反射が作動して、まず筋肉がガタガタ震えます。寒気がする。あれは熱をつくっているわけです。熱の産生をしている。同時に鳥肌が立つ。これは汗の腺を閉じて、熱の放散を防ぐということをやっています。こういうことが働くと、熱が上がってくるということになります。

漢方薬には「飲む時」がある

この辺から難しくなる

のですが、漢方の場合には経過が大事だという話をいたしました。例えば「葛根湯」が「医者」というふうなバカにした言い方をしますが、「葛根湯」は非常にいい薬で、これが使いこなせれば、一流の医者なのです。「葛根湯」が効かないと言うのはなぜかという、風邪の引き初めに飲まないからです。風邪の引き初めに寒気がして、首の後ろが張るような時にすぐ飲むと、非常によく効きます。大抵、「葛根湯」は一服、二服で勝負が決まるという薬なのです。

それで治らない場合には、病気が進んで、「太陽病」というところから「少陽病」というところに移るのですが、咳が出始める。そうなるので、た薬になります。それからその病気の勢いが抑え切れなくて体力が落ちてくる。熱を出す力もなくなってくる。こうなると「陰病」と言っている。このステージになってくる。寒気が強い。体力が消耗して倦怠感が強い。消化機能が落ちてくるというふうなことが起こります。

細かいことはいいのですが、まず漢方薬には「飲む時」があるということだけは、覚えておいてください。普通、最初は寒気がしてガタガタして熱が上がってくる。ところが、どうも日ごろから体力がないという方とか、疲れている。徹夜が続いているなどという時には、いきなり、「陰病」から始まる場合があります。これは「直中の少陰」という言い方をしているのですが、普通の「太陽病」「少陽病」というふうな熱が出るというステージを飛び越えて、いきなり寒気が強いという状態に入ることがあるのです。ふだんから体力があっても、徹夜が続くなど消耗している場合には、こういうことが起こり得るわけですね。

「陽病」にあるか「陰病」にあるか

を見極めるのは、体温ではないのです。ご自身の自覚症状で、熱いという感情を持つか、もしくは寒いという感情を持つか。例えば三八・九度の熱がある。しかし、寒気が強いという場合には、「陰病」と考えることもありますので、自覚症状が大事だということになります。それと大事なこととは風邪の時の陰陽と平素の陰陽とは、必ずしも結び付かないということです。「冷え性」というふうな病気というか、「冷え」は漢方の治療の対象になるのですが、東京でもまだ霜焼けができる人がいる。東京は暖かくなっているのですが、結構、いかな、と思ったのですが、結構、いらつしやる。そういうふだんの冷えがあるような場合には、トリカブトの類なのですが、「附子剤」とか、「当帰芍薬散」など、体を温めるような漢方薬を飲んでいううちに、血行が良くなって体が温まる。逆に、「陽証」の人で、血圧が少し高くて赤ら顔で、常に汗をかいているというふうな方には、「黄連解毒湯」というような薬で熱を冷ますということができることがあります。しかし、日ごろの陰陽というものと、熱のウィルスが入った時の陰陽は、必ずしも一致しないということになります。

最初から寒気の強いような風邪を

引くかどうかということとは、日ごろの体力にもよります。これは「実証」「虚証」という言い方をしますが、例えば朝靑龍を見て、あの人、弱そうだな、と思う人はいないと思うのです。これは大雑把な分け方ですが、朝靑龍は明らかに「実証」です。食べるのも速い。汗かきで体力もあり、筋肉質である。筋肉があるということとは熱産生が強いので、冷えなどとは無縁なのです。やせている人は筋肉がないために冷えというものが起こる。「実証」「虚証」というのは、大雑把に分けて、大体、見た目で判断ができます。「実証」の人はやはり「陽証」の風邪を引く。「虚証」の人は「陰証」の風邪を引きやすいということになります。

風邪の漢方薬

実際の薬の話をしますと、平素、ある程度、体力がある人は、熱産生の反応が十分にできる。それでは漢方は何をやるのかというと、熱の産生を早めるような、さつき言ったように、ウイルスが増える前に、いかに熱を早く上げるかというところが大事なのですが、熱を上げるのを助けるようなことをする。葛根湯を飲むのはこういう時期なのです。ま

さにウイルスが増える前、増えようとしている時に飲んで、早めにインターフェロンを出させる。首筋が張るとか、頭痛とか、熱が開始めるといような状態で飲むのが、葛根湯になります。

もう一つ、お子さんなどに多いのですが、「陽証」の風邪になると、割と「麻黄湯」という薬を飲んだりします。「葛根湯」や「麻黄湯」の場合に大事なことは、汗をかかないのです。体力があるので、汗をかかないようにして、熱を上げよう上げようという機転が働く。ところが、ちょっと体力がないと、白旗を揚げて城の門を開くように、汗の栓が開いてしまふ。そうすると、汗が出てくる。風邪の初期であっても、あまり体力がないという方の場合で汗をうつつらとかくようなタイプには、「桂枝湯」とか、「香蘇散」という薬になります。これは体が弱い方とか、高齢の方、妊婦さんなどでも、安心して飲める薬です。

「陰証」の風邪で、寒気が強いというふうな場合とか、顔が青白くて冷えが強いという方の場合には、「麻黄湯」とか、「葛根湯」という薬が出ます。「麻黄」というのは、いろいろな呼吸器の症状をとつたりするのですが、「附子」というのはトリカブトになりま

す。体を温めるために使う漢方薬です。「細辛」というのは、「辛い」という字がありますが、確かにからくって体が温まるというものです。こういったものを使う。もしくは「真武湯」という薬がありますが、これは冷えによる下痢とか、風邪の下痢症状とか、そういったものをとる場合に使います。「真武湯」という薬にも「附子」というものが入っていて、体を温める。要は体をいかに温めるかということが大事になります。「陰証」の風邪の場合には、自分で体を温める力があまりないものですから、薬で無理やり温めるといような感じになります。

風邪がその時期を過ぎてこじれてきた。ウイルスが増えちゃったよ、という場合には、仕方がないので、「小柴胡湯」とか、「柴胡桂枝湯」という薬を使います。この場合には、「葛根湯」と違って、一服、二服というわけにはいきません。「葛根湯」の場合には、一服、二服で勝負がつくので、それを飲んででも効かないということは、時期を間違えたか、「葛根湯」ではなかったかということになります。「葛根湯」の場合には、本当に一服、二服で自分の体が温まってきて、治ってくるのがわかるような感じがすると思うのですが、「小柴胡

湯」といような風邪の中期になってしまつと、最低でも三、四日から一週間ぐらひは飲まないと効かないという状態になります。その場合は、「小柴胡湯」か「柴胡桂枝湯」という薬になります。これは咳が開始めたとか、扁桃腺が腫れてしまつたといような時にも出しますし、「小柴胡湯」は、よく子供の体質改善として、中耳炎になりやすいとか、副鼻腔炎があるといような場合に使う薬です。

もつと長引いた場合には、「麦門冬湯」という非常にいい薬があります。空咳がとまらない。風邪は治りかけているのだけれども、咳だけが残るというのが非常に多いのですが、こういう場合には、「麦門冬湯」がよく使われます。それから「麻杏甘石湯」。これは「麦門冬湯」とは違って、少し湿つたような咳が残る。少しゼイゼイといような場合に使います。咳と痰が残っていて、夜、横になると眠れないといような場合には、「竹筴温胆湯」といような薬を使いますが、こういった風邪の慢性期になると、一服どころか、十日ぐらい飲まないと治らないということもしばしばあります。

風邪の回復期ですが、風邪は治つただけけれども、体力的にガクッと

落ちてしまう。これもよくあることです。だるいとか、食欲が出ない、寝汗が出る。こんな症状があれば、「補中益気湯」という薬を使って、体の調子を整えていくということをしていただきます。

この「補中益気湯」という薬は、ウィルスに対する予防効果がある。大体、漢方薬を飲んでいただいている方は、風邪を引かなくなりやすい。なぜなら、漢方薬は飲むわけです。なぜ飲むことが大事なのかといますと、腸の免疫をすこく賦活する。どの漢方薬も植物由来なので、セルロースとか、いわゆる食物繊維のよくなものがたくさん入っていますから、こういったものが腸を刺激して、インターフェロンの産生が大事だという話をしましたが、インターフェロン自体は出てこないけれども、インターフェロンを出すための準備状態をつくるわけです。要するに、ウィルスが来た時の対抗策を着々と準備しているというふうな状態になっている。そういう状態になっていると、ウィルスが来た時に、インターフェロンの出が速いのです。普通、われわれの体は、ウィルスが入ってきてから、ああ、どうしよう。準備しなきゃ、というので準備をして、それからインターフェロンを出すの

で、時間差ができてしまう。ところが漢方薬を日頃から風邪やウィルスに対する準備状態ができていて、風邪をひきにくい体になることができます。

エキス剤を飲む場合の注意

漢方薬というのは食事の間に飲むのが原則ですが、風邪を引いたと思つた時にすぐに飲む。手元になかつたらどうするのだ、ということになります。今は薬局などでも、「葛根湯」とか、いろいろな風邪薬を売っているのですが、まず医者へ行つて長く待たされるよりは、薬局へ飛び込む。もしくはかかりつけのドクターがいれば、そこへ行つて、「葛根湯」を出してくれ」とか、漢方薬を出してもらおう。粉で出ることが多いのですが、粉で出たものをそのまま水で飲むのではなく、湯飲み茶碗に入れて、熱湯を加えます。よく溶かすのです。場合によつては五分ぐらい、ずつとかき混ぜる必要はないけれども、少し混ぜてしばらく置いておくと溶けやすくなるので、そこでもう一回、スプーンで混ぜれば溶けます。もしくは、電子レンジで二、三十秒、温めるといふようなことをすると、温めるだけではなく、電子レンジのブ

ラウン運動で溶けます。さらに生姜を擦つて絞つた汁などを入れると、余計に温まります。風邪薬を飲みながらアイスクリームを食べるなどということをしてはいけません。とにかく体を温めることが大事なのです。

大体、飲むと、体が温まったな、ということがわかるはずですが、「葛根湯」なども風邪の初期に飲むと、寒気がとれるな、というのがわかつてくる。それが無い場合には、二、三時間後にもう一回、飲む。あまり汗をかき過ぎるのはよくなくて、ジトツと汗が出てくるような状態になると、風邪が治つていくな、という感じがわかつてきます。

薬の飲み合わせ

よくある質問ですが、ふだんから漢方を飲んでいる。「葛根湯」ももらつていられるけれども、風邪の症状が強いので、かかりつけのお医者さんのところへ行つたら、解熱剤と抗生剤が出た。その場合にどうするか、ということですが、まず漢方薬の場合には、熱を上げることが目的です。解熱剤というのは熱を下げます。アメリカとか、ドイツでは、赤ちゃんが熱を出すと、とにかく熱を下げるといふ目的で、水風呂に入れます。水

風呂に入れるというのは乱暴ですが、熱性痙攣などがあれば、それで防ぐということになるのです。ただ、解熱剤と漢方薬とは方向がちよつと違うので、あまり併用は勧めておりません。

ちなみに、「タミフル」はウィルスに直接、働く薬です。漢方薬というのは体に働くので、作用する場所が違いますから、その二つは相性がとてもいい。「タミフル」と「麻黄湯」との組み合わせで、小児科の先生が研究したりしていますので、この二つは相性が悪くない。しかし、解熱剤はあまり良くないということですが、それでは抗生剤はどうか。その話をする前に少し腸の話をしていただきます。人間の腸というのは広げるとテニスコートの一・五面あるのです。皮膚の二百倍。自分の体の中に、テニスコート一面半ものものが存在しているというのはどういうことかといえます。腸というのは壁があります。絨毛と言いますが、あの壁の中にさらに壁がある。これを微絨毛と言います。実は腸というのは、単に消化吸収を行うだけではなく、リンパ球の六割がそこに存在する。ものすごいリンパ組織なのです。血管も、体の中の微小血管の五五%、神経の五〇%がそこに存在す

る。ホルモンもいっぱい持つています。腸というのはものすごく大事な組織なのです。特に小腸が大事で、大腸に関しては、不幸にしてとる場合もあるのですが、大腸はとつてもどうにか生きていくことは可能です。ただ、小腸というのはなくてはならない器官なので、これがないと生きていけないということになります。

なぜ腸の話をするのかというと、漢方薬の成分の中には糖がくっついていて、昔は一日一三回でまれている薬は、昔は一日一三回でした。もしくは抗生剤であれば、一日一四回とか、六時間置きとか、血中濃度が下がらないようにするという出し方をしたわけです。今はゆっくりゆつくり溶けて吸収されるので、一日一回とか、二回で済む。日本人は、結構、まじめな民族なので、三回、四回でも、六時間毎でも飲めるのですが、アメリカ人は文化的に、一日一回でなければダメなのです。実はわれわれはアメリカで漢方薬の研究をやっているのですが、「一日一三回飲む」と言ったら、「アメリカではダメだ。一回か二回にしてくれ」ということで、今、二回でやっています。

どうして少ない回数ですむかといいますと、配糖体といって糖がくっ

ついていて、胃酸には強いんです。腸まで行って、腸の中には百兆、腸内細菌がある。われわれの体の中の細胞の数は、六十兆個とか、四十兆個という数なのですが、それよりはるかに多い腸内細菌がいる。実は腸内細菌というのはいろいろなことをやっているもので、ペットとしてもいいんです。医科歯科の藤田先生は、十二メートルぐらいになる条虫をペットにしています。そうすると、太らなくて済むということですが、お酒を飲み過ぎたら出てしまったとか言つて、また新しい条虫を飲んで

いるということですけども、あれは非常に大きいんです。目黒に寄生虫館というのがあって、十二メートルぐらいの条虫の標本があるので、本当にあんなのが体の中に入るのでどうか、というぐらいのがあります。片一方の腸内細菌は、本当に目に見えないぐらいの、要するに大腸菌ですが、ああいうのが百兆ぐらいある。最初あまりかわいくないのですが、自分の体の中でのいろいろなことをしているというのがわかると、いとおしく思ったりするところもあるわけです(笑)。われわれの研究室は腸内細菌の研究をいろいろやっているものですから、愛着があるのですが、そういったものが働い

て、初めて吸収されるというものなのです。

ちなみに、漢方薬の中には、糖のついていないものはいっぱいあります。こういったものが働くためには、腸内細菌で分解されることが大事なのです。

どういふふうな実験をしたかといいますと、漢方薬を飲むと、血中濃度が上がってくるのですが、配糖体というのは、腸で糖が外れてから吸収されるので、大体八時間とか、十二時間とか、後れて吸収される。この場合には十二時間ぐらいで吸収されます。抗生物質を飲むとどうなるのか。要するに、抗生物質というのは悪い菌をやつつけるために飲むのですが、われわれの体の中にある腸内細菌をもメタメタにしてしまう。それで抗生物質を飲んでみると、下痢をしたりすることが起こるわけです。従つて、抗生物質を飲むと、途端に漢方薬の吸収が悪くなる。これはまた別の薬でやつても同じことです。要するに、われわれの体の中に腸内細菌があるおかげで、漢方薬が効くということもあるわけですから、抗生物質と漢方薬を一緒に飲んでいかどうかという質問では、答えは「ノー」ということになります。

方薬を飲んでいて、それで抗生剤を飲まなければならぬ場面があるわけですね。例えば化膿している場合とか。そういった場合には、当然、抗生剤を優先する。漢方薬の吸収は、多少、悪くなるけれども、漢方薬の場合には、逆に菌が増えて、命にかかわるといふのは違うので、多少、効きが悪くなつても、抗生剤を優先するということが必要なんです。ただし、風邪の場合には、抗生物質を飲む意味はあまりないので、今はあまり出さないと思ふのですが、その場合には、抗生物質と漢方薬は、あまり一緒に飲まないほうがいいということになります。

ちなみに、いろいろな腸の細菌が抗生剤によつて落ちてしまう。十の十乗個あるような菌が、ゼロに近くなつてしまうということが起こりますので、抗生物質というのは、われわれの体に対して、ものすごくいろいろな影響を与えているのです。

漢方にしかできないこと

逆に漢方にしかできないものがあるという話を、二つばかりいたします。一つは、胃潰瘍とか、胃炎などはないのだけれども、胃がもたれるとか、食べたものが下りていかない。

食べるとすぐにお腹が張ってしまふというような方が結構多い。もしくは、食べたものがしばらく残っていて、逆流すると胸やけがする、こんな方が増えています。胃にはいろいろな働きがあります。攪拌して、食べたものをこなごなにするという働きがある。それからペプシンでたんぱく質を分解する。こういった働きがあるのですが、もう一つ大事な働きは、食べものが入ってくると、モノをため込むという作用です。例えば皆様方のお食事の回数は、大体、三回だと思ふのですけれども、ネズミの規則正しい食生活は、彼は夜行性なので、夜中に食べ続けている。胃がものをため込むことができないのです。ただ人間でも、胃をとられたら、モノをためる力がないので、一回に少量ずつ、回数を多く食べるといふ食べ方になります。胃を切除していなくても食べた物をためることができることがあります。われわれの胃がモノをため込むことができないう場合には、胃がもたれるとか、時間が来てもお腹が空かない。でも、時間が来たので、しょうがないから食べている、というようにことが起こります。そういう場合に、いろいろな薬があるのですが、漢方では「六君子湯」という薬を使います。

ここでもう一回、胃の働きの整理をしますと、まず胃の蠕動運動、収縮ということで、モノを攪拌して混和する、食べものをミックスする働き、そして小腸に送り出すという働き、消化する働き、それから貯留という働きがあります。この貯留能がやられた場合には、腹部の膨満感がある。そういったものに対して効くのが「六君子湯」という薬になります。これは物をため込むための弛緩反応が衰えている場合に、もう一度、弛緩反応をさせるお薬です。逆に、モノが入った時に、胃が広がらないとモノを送り出せない。いつまでもそこにどまっているということが起こります。一たん広がってから小腸に送り出すということが、「六君子湯」の働きになります。

実はこれは西洋の薬には全くない働きなのです。西洋の薬では、一生懸命、胃の収縮運動を盛んにしようという働きはあるのですが、それをやつてもうまくいかない。なぜなら、拡がるということがなければ、なかなか効率良く送り出せないのです、まずその拡げるといふことができるのは、「六君子湯」という薬だけということになります。これが一つ。

もう一つは、イレウスで使う「大建中湯」という薬です。「イレウス」

というのは「腸閉塞」という言い方をしますが、腸の動きが悪くなる。例えば外科の手術の後であるとか、癒着が起るなどといった場合に、腸の動きが悪くなる。そういったものを改善するものとして、「大建中湯」という薬があります。これはイレウスだけではなく、お腹が張る。ガスが多い。便秘があるというようなものでも使うのですが、大事なことは、お腹の冷えがあるという場合は、薬なのです。お腹が冷えると動きが悪くなる。そうすると、便秘になる。もしくは腸閉塞になるわけです。

あるドクターが、学生時代に虫垂炎で腹膜炎を起して手術をしました。医者になった時に、麻酔科の医者になったのですが、手術室はいろいろな機械が置いてあって、なかなか暖かくできないので、手術室で麻酔をかけていると冷えてしまう。冷えると昔の傷が痛むというか、腸の動きが悪くなって、イレウス症状を起すといふので、「大建中湯」を飲んでもらっています。そんな時によく効くのですが、こつとしては、冷えによる腹部の膨満とか、腹痛、こういったものに使います。

中に入っているものは四つだけ。ウナギの時にかける山椒、朝鮮人参、乾姜（生姜を蒸したもの）、麦芽糖、

こんなようなものが入っている単純な薬なのですが、これで冷えた胃腸を温めて、腹痛を鎮めて腸管の運動を改善することなのです。

例えば整形外科の領域で、脊椎の手術をするというので、長い間、ベットに寝ていなければいけないというような方がいます。そういう場合には、動かないものですから、どうしても腸の動きが悪くなる。そういった方に「大建中湯」を飲んでもらうと、ふだんから体力がなくて冷えっぽいような人のほうが、有効率が高いのです。

これは慶應でのデータですが、慶應病院では、大腸癌の手術の後に、必ず「大建中湯」を飲みます。そうすると、入院の日数が減る。例えば腹腔鏡の手術をすることで、入院の日数が二・四日ぐらい減るわけですが、そこに「大建中湯」を被せると、さらに四日ぐらい減らすことができます。なぜ大腸癌の手術の後に「大建中湯」がいいのかというと、大腸癌の手術の後、腸が動かないと癒着が起るわけです。癒着が起らないように、腸を少し動かしてあげると、これはあまり早期に動かしてしまつたり縫つたところが開いてしまつたりしますので、タイミングを見てなのですが、ちよつと動

かしてあげることによって、癒着を防ぐ。体力の回復も早まるということ、入院の日数が短くなるということに考えています。これは西洋の薬には全くない発想で、漢方ならではのことかな、というふうに思います。

癌の治療

癌治療の話をしたのですが、最近、「アガリクス」とか、「メシマコブ」とか、広告の過剰ということ、摘発を受けていますけれども、やっぱり癌になった場合には、どうにかして治したいという気持ちが強いと思うのです。おカネには糸目をつけないという方が多いのですが、当然だと思います。そういうところには付けどむような商法がいろいろあるのですが、基本的には、漢方の位置づけは補助療法です。主役にはなれない。ただ、「脇役として、西洋の治療をがっちりサポートしますよ」というふうに患者さんに話しています。

手術をしたくない。もしくは放射線はかけたくない。漢方で治してくれ、という方が、時々、いらつしやるのですが、「それは治りません」というふうにはつきり申し上げます。

漢方だけで癌が治るといふことは、私の今までの経験の中でもないですし、もしあるとしても、癌は自然治癒する場合もあるので、漢方のためかどうかはわからない。ただ、経過が良くなるということは、いろいろ経験していますので、そのところは自信を持ってお話しできますが、あくまでも補助療法であるということとです。抗癌治療に耐えられるような体の状態をつくる。体力をサポートするということが一つ。それから抗癌治療の副作用を抑制するということかな、と考えることができます。

全身状態の改善ということよく出す薬が、これは風邪の治り際に体力を回復する、という話をしたのですが、「補中益気湯」という薬と、「十全大補湯」という薬。この二つは非常によく使う薬です。癌の初期から、残念ながら、緩和ケアとか、積極的な治療があまり有効でないだろうというような段階の方まで、幅広く飲める。どういう状態においても基礎体力をつける、免疫力をつけるということは大変なのですが、この二つは本当にいろいろな意味で免疫を賦活する薬で、飲んでいて決して悪い薬ではない。漢方の考え方の中に、一番上の薬、上等の薬とい

うふうなものがあります。これは長く飲んでいても害はない。むしろ長く飲んだほうがいいという薬なのですが、「朝鮮人参」などは当然そうです。十全大補湯とか、補中益気湯は、何十年も飲んでいただいていいと思うのです。こういうものを飲んでいると、体力の衰えも防げるし、風邪も引きにくくなります。

もう一つ、「人参養榮湯」も非常にいい薬なのですが、これは「十全大補湯」のバリエーションというふうな考えますので、まず「十全大補湯」か、「補中益気湯」を飲むことが多いです。

あとはいろいろな症状の緩和。例えば食欲がないと、人間は元気が出ないですね。それは腸の免疫が賦活されないからです。同じような栄養の成分が点滴で行っても力が湧かない。やっぱり食べるということがものすごく大事で、その食べることが、それをサポートするのが、「四君子湯」という薬だったり、「六君子湯」「人参湯」という薬、このようなもので食欲を増すということと、

だんだん癌の状態になってくると、体力が落ちてくるので、冷えつぽくなってしまう。そういう場合には下痢を来すことがあって、「真武湯」とか、「人参湯」という、胃も温めるし、

腸も温めるという薬をお飲みいただきます。黄疸が出た場合には、「茵陳蒿湯」という薬。むくみの場合には、「五苓散」という薬。痛みに対しては「十全大補湯」とか、「桂枝加朮附湯」という薬。癌ノイローゼというか、落ち込んでしまうという場合には、気の巡りを良くするというような薬をお出しします。「香蘇散」というのは風邪薬のほうにも出てきたのですが、もともと中国では風邪薬なのです。江戸時代に日本に伝わって、気の巡りを良くするという目的に使われるようになりました。あと、「半夏厚朴湯」という薬。こんなようなものを、嫌な気分を吹き飛ばそうというようなことでお出しします。手術の後のイレウス予防ということでは「大建中湯」「小建中湯」を出す場合もありますが、「大建中湯」が非常に多く使われます。

くり返しになりますが、漢方はいくまでも補助療法である。時には抗癌治療を全うするといえますか、例えば吐き気のために抗癌剤を使うのは嫌だ。こんなつらい治療は嫌だというような人に、「吐き気を止めてあげましょう」ということで癌の治療を続けてもらうというようなことをする。それから白血球がなかなか戻らないという場合に、白血球を少

し上げるように手伝いましょう、ということ、治療の遅れをなくすというふうなこともします。

そういうふうには、あくまでも主役は抗腫瘍治療であって、それを側面からサポートするといふような治療を行う。吐き気をとめるのは、胃の冷えと食欲を増すといふところに出てきた「人蔘湯」とか、「小半夏加茯苓湯」といふ薬、こんなふうなもので収めます。それから抗腫瘍剤の脱毛は、全部は無理なのですが、「十全大補湯」といふ薬が使われます。白血球が減る、貧血が進んでしまうという場合にも、この「十全大補湯」は本当に幅広く使えます。例えば抗腫瘍剤で粘膜炎がやられることがあるので、口内炎とか、痔になるという場合にも、やはり「十全大補湯」が使われます。痛みどめにモルヒネ製剤などが使われると、便秘になるのですが、モルヒネ製剤の便秘に対しては、「大建中湯」がよく使われます。

ました。(拍手)

質疑応答

質問A 私、緑内障で、かなり末期のほうで苦しんでいるのですが、風邪を引いた時に、市販されている風邪薬は、緑内障の人は飲めないといふふうによく書いてありますよね。先程、「葛根湯」とおっしゃったのですが、飲んでも構わないのでしょうか。全然、問題はないのでしょうか。

渡辺 「葛根湯」も特に問題はないと思います。無難なところでは「香蘇散」でしょうか。風邪薬で緑内障に悪いというのは、一般的には自律神経に対する作用が問題になるのでしょうかね。漢方薬では、たぶん、問題ないと思います。

質問B 私は腸があまり丈夫でなくて、たんぱく質なら、大体、何を食べても大丈夫なのですが、今、よく、野菜をいっぱい食べなさい。繊維質のものをいっぱい食べなさい、と言われるのですけれども、そういうものを食べると、すぐ下痢になっちゃいます。だけど、野菜をやめると、すぐ元に戻るのですが、どうしたらよろしいでしょうか。

渡辺 それは食物繊維が合わないのだと思います。食物繊維が多いと下痢を来す。

質問B 普通に考えて、多いといふほどは食べていないんです。ミカンを食べてもお腹が痛くなつて、すぐ下痢ぎみになつちゃうんですけれども。

渡辺 茹でた温野菜なんかも同じですか？

質問B それも特に柔らかく茹でないでダメで、皆さんと一緒に食事をする時、ちよつと野菜を残しちゃうんですけれどもね。

渡辺 やつぱりお腹が冷えると下痢になるのではないですかねえ。食物繊維と関係があるかどうかというのは、ちよつとわからないのですが、例えば寒天とか、そんな中でも下痢をされる方もいらつしやいますし。

質問B 寒天は全然ダメです。

渡辺 もしくは冷えが原因か、どちからというのは見極めたほうがいいと思います。食物繊維自体は、それほど悪くはないはずですが、潰瘍性の大腸炎とか、病気によっては悪い場合もあるので。あとは、なるべく温野菜をとる、温めたものをとるということをしてみたらいかがでしょうか。

質問B べつに腸の病気というわけではないわけですね。

渡辺 それは調べないとわからないです。

質問C 私、大腸癌を手術しまして、今年で四年目なのですが、去年、三年目の十二月に腸閉塞になつて、今、「大建中湯」がいいとおっしゃったけれども、飲んだほうがよろしいでしょうか。

渡辺 基本的にはとてもいい薬なんです。それが合うかどうかというのは、やはり診察してから決めないといけないので、慶應病院に来ていただければ、お出しします。

質問C 手術してから、べつに薬を飲めとおっしゃらないのですが、腸閉塞をやつたのが二回目なので。

渡辺 それでしたら飲んだほうがいいと思いますね。「大建中湯」の場合に、山椒がちよつとからいんですね。その味が嫌だという人も中にはいらつしやるので、その場合には、「小建中湯」という薬になります。その見極めをするためには、一度、拝見させていただいたほうがいいかな、という気がいたします。

司会 そろそろお時間でございます。最後に交詢社常務理事の長澤からご挨拶がございます。

長澤常務理事

私はきょう、またまなのですが、朝、インフルエンザの予防注射に行つてまいりました。予防注

射をやった方はご存じだと思いますけれども、終わると、インフルエンザの注意書きみたいなパンフレットのようなものをくれます。あれを読みましたら、インフルエンザと一般

の風邪とは違うか、というようなことが書いてありまして、先程、画面に出てきましたように、インフルエンザはインフルエンザ・ウイルス、一般の風邪は四種類ぐらいのウイルスが原因になっているようでございます。比べてみると、やっぱりインフルエンザ・ウイルスは、普通の風邪のウイルスより強いのではないかと思えます。ですからなかなか死なないで、高熱が出たり、ほかの病気との合併症が出たりするようです。そういう状況になったら、病院

へ行ってお医者さんに診てもらおう方がいいと思うのですが、私は普通、風邪を引いた時にはどう対応しているかというところ、葛根湯を飲むことにしています。しかし、これは本当に時期が難しく、風邪かな、と思つた時にすぐ飲まないで、もうちょっと様子を見ようとか、二、三日過ぎると、ほとんど効かないというところがありまして、結局、最後は病院へ行かざるを得ないということになります。皆さんも、風邪かな、と思つた時に、その状態で病院へ行くと

いう人はいないと思うのですが、そういう時に「葛根湯」を飲むと、本当に効くような気がいたします。ぜひ参考にさせていただければと思います。

最近漢方薬に対する信者といいますが、需要といえますか、漢方薬で治したいという患者さんが非常に増えてきているようございまして、きょうも渡辺先生は患者さんがものすごく多かつたため、時間ギリギリに駆けつけて来られたような次第でございます。大変忙しい中を、交詢社の年末最後の医療講座に駆けつけていただきまして、改めて厚く御礼を申し上げます、今後のご活躍をお祈りしたいと思います。

(拍手)

〈講演者の紹介〉

渡辺 賢治(わたなべ けんじ)

慶應義塾大学医学部漢方医学講座
助教授

医学博士

昭和五十九年慶應義塾大学医学部卒業、昭和六十三年慶應義塾大学医学部内科学教室助手、平成二年東海大学医学部免疫学教室助手、平成三年米国スタンフォード大学遺伝学教室に留学、平成八年北里研究所東洋

医学総合研究所漢方診療部医長、平成十二年北里研究所東洋医学総合研究所臨床研究部副部長、平成十三年慶應義塾大学医学部東洋医学講座(現漢方医学講座) 助教授

日本東洋医学会理事、日本東洋医学指導医、和漢医薬学会評議員、日本内科学会専門医、米国内科学会上級会員、他多数。

なお、本稿は平成十七年十一月三十日(水)開催の当社主催、中央区並びに中央区教育委員会後援の公開講座における講演要旨である。